

# 使い分け意識の世代差とことばの異同意識

## —山形県三川町における調査—

小橋川 統

### 1. はじめに

方言調査などに行くとお年よりの方から「若い人はこの方言は使わない」ということばを耳にすることがある。若い世代などでその地域の伝統的な方言が使われることが減ってきているのである。

ということは方言の使用意識においても、世代間でなんらかの差がみられても不思議ではない。ここでは、「方言と標準語の使い分け」に注目した。使い分けが起こる要因には相手との親疎・年齢差などがあるが、それには世代差はあるのだろうか。

また、自分の使うことばは「自分が何者であるか」というアイデンティティに大きく影響する。鶴岡、酒田といった大きな市に隣接する三川町では、自分たちのことばと他の市町村のことばについて、どのように意識しているのだろうか。本稿ではこれらの異同意識<sup>1</sup>を中心にみていく。

### 2. 調査概要

山形県東田川郡三川町でアンケート調査を行い、18歳から77歳まで合計77人からの回答を得た。今回の調査の分析は「世代差」に注目し、話者を満60歳以上(24人)、35歳から59歳(25人)、34歳以下(28人)の年代別に分け、それぞれを高年齢層、中年層、若年齢層と定義して行う。

### 3. 方言と標準語の使い分け

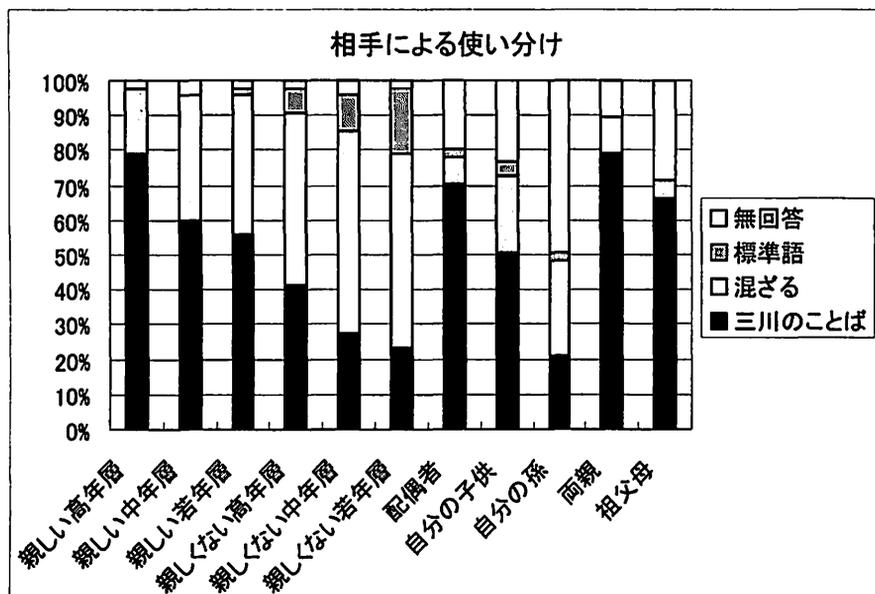
アンケート調査ではまず、「あなたは、次に挙げるような相手や場面ではどのように話しますか」という質問をし、「三川町のことばで話す」「三川町のことばと標準語が混じる」「標準語で話す」の三つの選択肢の中から答えてもらった。

#### 3.1 相手による使い分け

##### 3.1.1 相手による使い分け・全集計

図1は、三世代すべての回答を合計したグラフである。

図1



全体的に、「標準語で話す」という回答はほとんどみられなかった。混ざり具合の多少はあるにせよ、三川町ではみな三川町のことばを使って話しているという意識が強いようだ。

図の「高年層」「中年層」「若年層」という語は、実際のアンケートでは「三川町内の親しい（あまり親しくない）お年寄りの方」、「三川町内の親しい（あまり親しくない）30代から50代くらいの方」、「三川町内の親しい（あまり親しくない）10代から20代くらいの方」という言い方を用いた。相手の年齢だけでなく親疎で分け、年齢と親疎関係の二つの軸によりどのように使い分けが意識されているかをみようとした。

そうした相手と話すときでは、「三川町のことばで話す」という回答の割合は「親しい高年層」を相手としたときが約8割ともっとも多かった。親しい中年層、親しい若年層が約6割とその次に続く。「親しくない」相手では「三川町のことばで話す」の回答がもっとも多かった高年層でも4割程度で、三川町のことばで話すかどうかは、相手の年齢よりも親疎関係に影響されているようである。三川町のことばは、相手の年齢がどうかということよりも、相手が自分と親しいときに多く使うと意識されていることばだといえる。

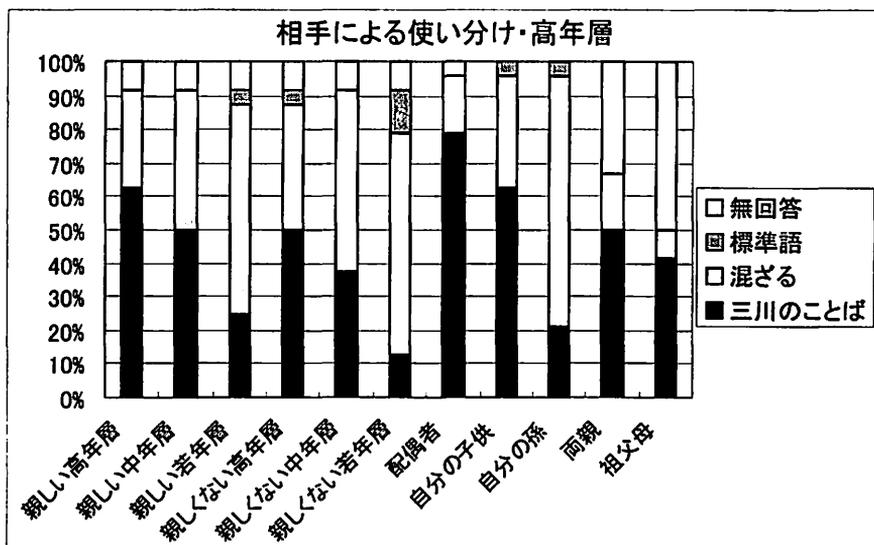
また、「配偶者」「自分の子供」「自分の孫」「両親」「祖父母」という項目では家族内というきわめて私的な、方言が出やすいと思われる相手どうしでどのような差が出てくるかをみようとした。

家族を相手にしたときでは、両親・配偶者・祖父母とも「三川町のことばで話す」という回答が7～8割前後と高比率を占めた。しかし自分の子供・孫が相手の場合、「三川町のことばで話す」という回答はそれぞれ5割、2割と大きく減少する。「そうした相手がない、ふだんそうした相手と話す機会がない、という方は回答されなくて結構です。」と調査票には記したので、まだ子や孫がない若年層・中年層世代の無回答が多かったのも原因だが、無回答を除いて集計してもやはり、自分の子供・孫を相手にしたときの「三川町のことばで話す」という回答は6割、4割と先の三者より低い。

たとえ家族でも、若い世代に対しては三川町のことばはあまり使わないと意識されているようである。ただし「標準語で話す」という回答は少なく、代わりに「三川町のことばと標準語が混ざる」という回答が増えていることから、三川町のことばと標準語を混ぜながら若い世代とコミュニケーションをとろうとする姿がうかがえる。

### 3.1.2 相手による使い分け・高年層

図 2



家族以外の相手に対して、「三川町のことばで話す」の回答の割合がもっとも大きいのが「親しい高年層」(約6割)である、というのは先の全体集計と同様だが、続いて「親しくない高年層」が「親しい中年層」とほぼ同じ割合(5割)で「三川町のことばで話す」としている。一方、若年層は親疎を問わず「三川町のことばで話す」という回答が少ない。

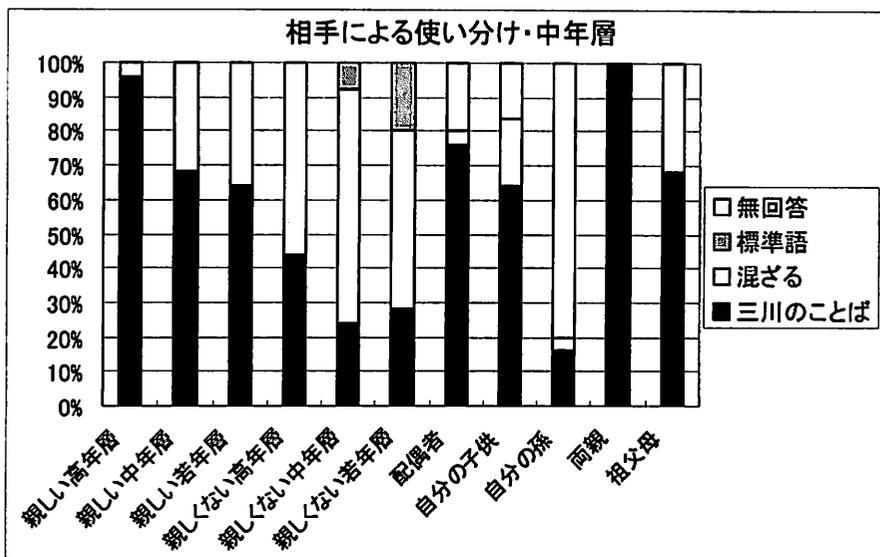
さきほどとは逆に、高年層においては親疎関係よりも相手の年齢を重視して使い分

けを行っているという意識が強い。具体的には、中年層に対してまではある程度三川町のことばで話す、若年層に対しては標準語を混ぜて話す、という意識があるようである。若年層に対しては三川町のことばで話しても通じない、という意識が高年層は強いのかもしれない。

同様のことが、家族との会話でもいえる。配偶者と話すときでは8割が「三川町のことばで話す」と回答しているが、自分の子供と話すときでは6割、自分の孫と話すときではわずか2割となる。逆に「三川町のことばと標準語が混ざる」という回答は2割弱→3割→7割と増えており、高年層は下の世代と話す際、標準語を混ぜて話しているという意識が強い。

### 3.1.3 相手による使い分け・中年層

図3



「三川町のことばで話す」という回答の割合を比較すると「親しい」相手が上位、「親しくない」相手が下位となる。全体集計の傾向と同様、中年層においても親疎関係により使い分けをしているという意識が強い。

ただし「親しい」「親しくない」どちらのグループにおいても中年層・若年層がほぼ同じ割合（親しい：6～7割、親しくない：2～3割）で「三川町のことばで話す」と答えているのに対し、高年層がそれよりかなり高い割合（親しい：9割強、親しくない：4割強）で「三川町のことばで話す」と回答している。

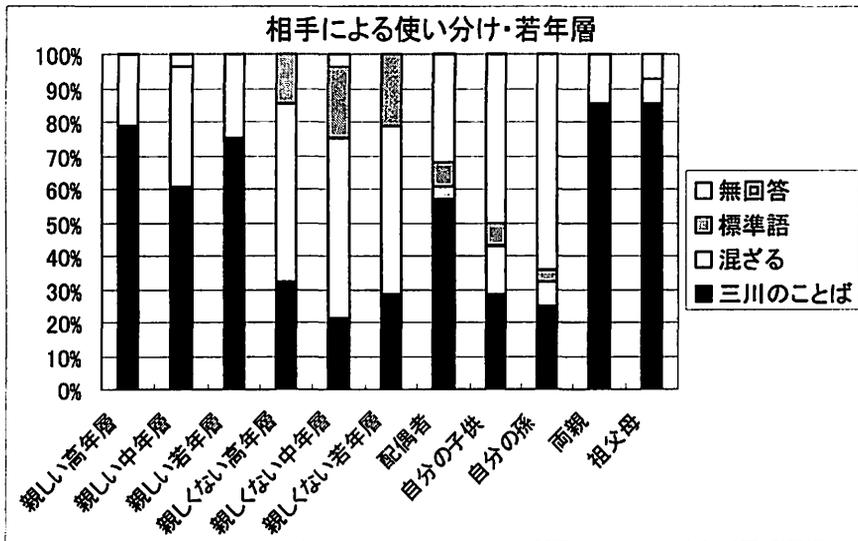
自分自身と同じ世代である中年層より高年層と話すときのほうが「三川町のことば

で話す」という回答が多いというのは、中年層は高年層と話すときは三川町のことばをふだんより意識的に話しているといえる。

家族を相手にしたときは「標準語で話す」という回答はいっさい出てこず、無回答を除けばきわめて「三川町のことばで話す」という回答が多い。とくに両親と話すときなどは中年層話者全員が「三川町のことばで話す」と答えている。中年層は家庭内において、三川町のことばを使っているという意識が強い。

### 3.1.4 相手による使い分け・若年層

図 4



全体の集計や中年層の集計と同様、「三川町のことばで話す」の回答の割合は「親しい」相手が上位 (6~8 割)、「親しくない」相手が下位 (2~3 割) とはつきり分かれる。親疎関係が使い分けにおいて意識されているのは、若年層が最も顕著である。

ただ、「親しい」「親しくない」どちらのグループにおいても中年層に対して「三川町のことばで話す」という回答の割合が最も少ない。これは、若年層にとって中年層は職場の上司など社会的に目上・目下の関係にあることが多いので、そうした公的な場において完全な三川町のことばを使うのはふさわしくない、という意識が働いた結果かと思われる。

### 3.1.5 相手による使い分け・まとめ

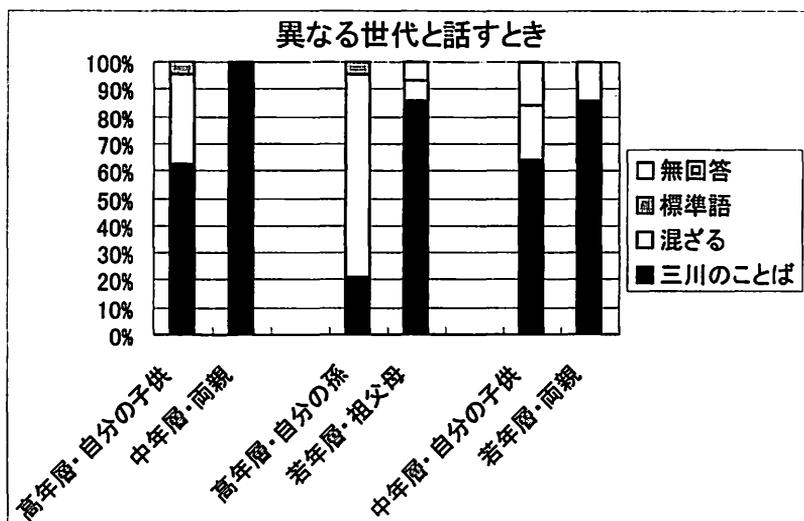
「標準語で話す」という回答はごく少なく、三川町の人には完全に「三川町のことば

で話す」か、それとも「三川町のことばと標準語が混ざる」かを相手により使い分け  
ているという意識が強いようである。

そうした使い分けにおいて、全体としては相手との親疎関係を年齢よりも意識して  
いるが、高年層においては相手の年齢をより意識している。

また世代間での意識差をみるため、若年層にとって中年層・高年層は両親・祖父母  
の世代に、中年層にとって高年層は両親の世代にあたる考え、それぞれがどんなこ  
とばで話していると意識しているのかを家族内の会話（「両親・祖父母と話すとき」「自  
分の子供・孫と話すとき」）の項目で比べた。

図5



高年層は中年層の親世代なのだから、高年層の「自分の子と話すとき」と中年層の  
「両親と話すとき」のことばは同じものになるであろうと予測していた。しかし中年  
層はその際全員が「三川町のことばで話す」と答えているのに対して、高年層は6割  
しか「三川町のことばで話す」と答えておらず、両者の回答には差がみられる。

一般的に考えて、中年層より高年層の方が伝統的な三川町のことばを保持している  
ものと思われるが、中年層は高年層と話す際に高年層のことばに合わせようとして、  
意識的に三川町らしさのより強いことばで話そうとしているのではないだろうか。同  
じ中年層でも若年層に対して話すときではこれほど「三川町のことばで話す」とい  
う回答は多くなく、特別に高年層に対して「三川町のことばで話す」という意識が強い  
のが分かる。

同様に若年層も、自分より伝統的な三川町のことばを保持しているであろう両親・

祖父母に対して話すときは、いずれも相手を上回る高い割合で「三川町のことばで話す」と答えている。家族内の会話において、若い世代は年長の世代に対し、相手のことばに合わせるため意識的に三川町らしさの強いのことばで話そうとしているようである。

逆に、年長の世代である高年層が中年層・若年層と話すときをみると、「三川町のことばと標準語が混ざる」という回答が目立つ。特に若年層と話すときは7割以上が標準語混じりで話すと答えている。同じく三川町で調査を行った、本誌掲載の田部論文の「今の若い人たちは方言が使いなくなってきていると思いますか?」という質問において、高年層の6割が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えているが、高年層は三川町のことばが使いなくなってきている若い世代に対して話すときは意識的に標準語を混ぜて、相手に合わせようとしているのではないだろうか。三川町では、各世代が相手の方言の使用能力の違いについて意識しており、お互い相手のことばに合わせて話そうとしていると考えられる。

## 3.2 場面による使い分け

前節の「相手による使い分け」では家族や親しい人など、すべて「三川町の人」を相手にどのような違いが生じるかをみた。この「場面による使い分け」ではバスに乗り合わせた人・セールスの人など、相手を三川町の人に限っておらず、また同じ場面でも三川町と東京・仙台など、異なる地点を設定した。この中でどのような違いがあるのかをみてゆく。

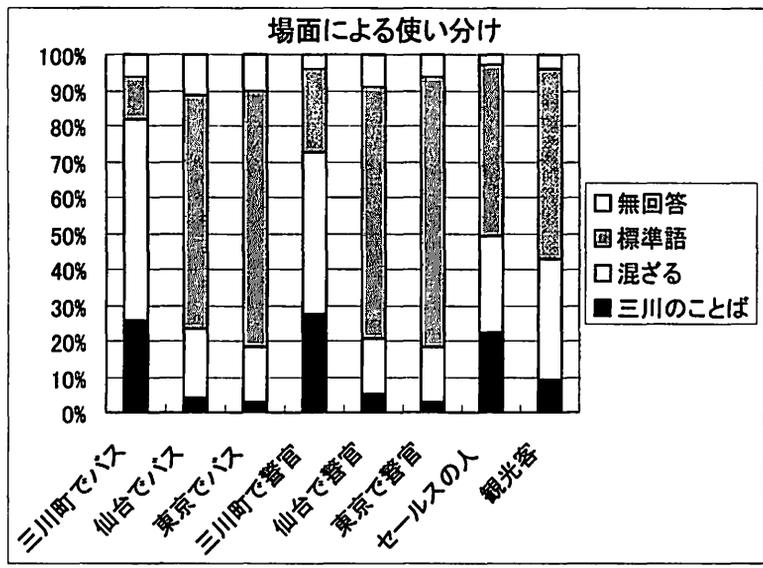
### 3.2.1 場面による使い分け・全集計

図6は、三世代全ての回答を合計したものである。図の「～でバス」「～で警官」というのは実際のアンケートではそれぞれ、「～でバスに乗り合わせた人と話すとき」「～で駐在所の警官と話すとき」という言い方を用いた。「セールスの人」は「三川町でセールスや配達のために訪れた初対面の人と話をするとき」、「観光客」は「三川町で観光客と話すとき」という言い方を用いた。

相手が三川町の人に限られていた図1と比較して、極端に「三川町のことばで話す」という回答が減る。このような場面では「三川町のことばと標準語が混ざる」か、「標準語」だけで話すかを中心に使い分けしているという意識が強い。

「三川町でバスに乗り合わせた人と話すとき」「三川町で駐在所の警官と話すとき」の二つが、「三川町のことばで話す」の回答が比較的多いが、それでも図1に示した

図6



相手などと比べると少ないほうである。「バスで乗り合わせた人」という言い方の場合、たまたま乗り合わせた初対面の人という感じが強いので、「三川町のことばで話す」という回答が減ったのだろう。また「駐在所の警官」というのは権威的な存在であり、公的な場面という印象を話者が受けたのではないだろうか。三川町の駐在所にいる警官は任命されて町の外からやってくる人も多いため、その点も「三川町のことばで話す」という回答が減った要因なのではないかと考えられる。

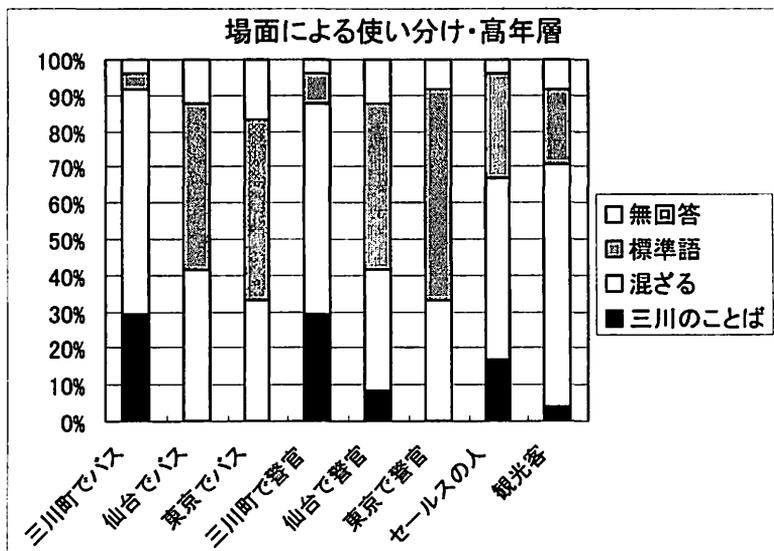
バスで乗り合わせた場面どうし、警官と話す場面どうしで比べた場合、地点が仙台や東京となると三川町で話すという場合に比べ極端に三川町のことばを使う回答が減る。仙台や東京では三川町のことばを使いづらいと考えているようだ。後に触れる「ことばの異同意識」でも話者のほとんどが仙台・東京のことばを三川町のことばとは大きく異なるものと考えていることと関係しているのだと思われる。

また仙台の場面と東京の場面を比べてもほとんど差がなかった。これも「ことばの異同意識」で仙台と東京の差が小さいことによるものなのだろう。

また、場所は同じ三川町内でも、観光客を相手にしたときはバスで乗り合わせた人・警官・セールスの人といった場合に比べ「三川町のことばで話す」という回答は半分ほどまで減る。バスで乗り合わせた人や警官、セールスの人などは三川町のことばが分かる人たちだが、観光客は三川町のことばで話しても分からないだろう、という話者の意識が読み取れる。

### 3.2.2 場面による使い分け・世代別

図 7



高年層の回答を集計したのが図 7 である。「三川町のことばと標準語が混ざる」という回答は高年層が三世代の中で最も多く、その分「標準語で話す」という回答が他の世代に比べて少ない。

本誌掲載の田部論文の「標準語をうまく話す自信があるか」という質問において「自信がない」という回答は高年層がもっとも多いのをみると、高年層は本当は標準語を話そうとしているが、標準語をうまく話す自信がないため「混ざってしまう」と考えるのではないだろうか。高年層のそうした自信のなさが、「三川町のことばと標準語が混ざる」という回答が増えた要因となったように思われる。

中年層の回答を合計したのが図 8 である。中年層は、高年層とは逆に「混ざる」という回答は少なかった。特に東京・仙台の場面においては「混ざる」の回答は 1 人しかおらず、約 9 割が「標準語で話す」と答えている。田部論文の「三川町のことばと標準語を使い分けることについてどのように感じますか?」という質問で、中年層からは「不自然だ・屈辱的だ・わずらわしい・使い分ける必要はない」などの使い分けに否定的な意見はいっさい出ず、逆に「けじめがあってよい・当然だ」など使い分けに肯定的な回答が中年層はもっとも多かった。使い分けるべき場面において中年層はしっかり使い分けよう、という意識が他の世代より強いといえる。

図 8

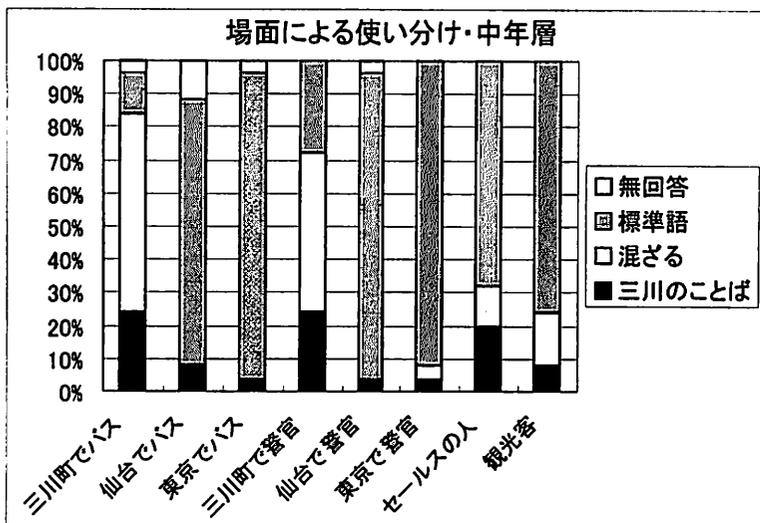
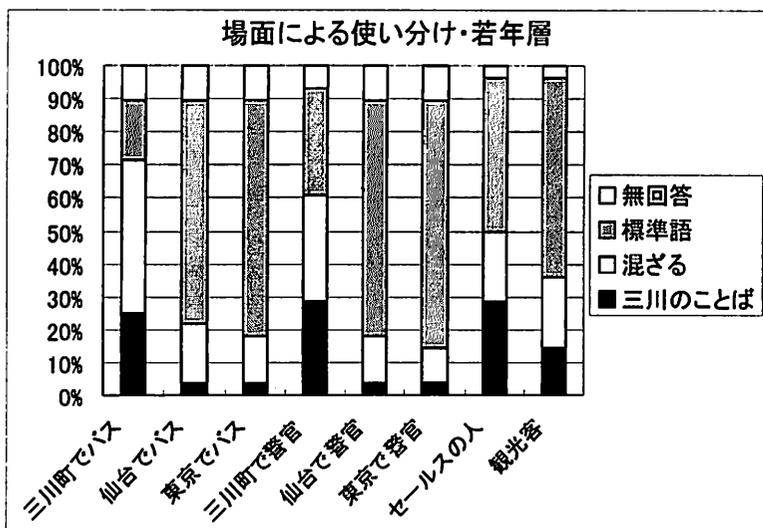


図 9



若年層の回答は高年層・中年層の中間で、全体集計にかなり近い値となった。

### 3.2.3 場面による使い分け・まとめ

場所が三川町でも、相手が初対面の場合や公的な場面だと、「三川町のことばで話す」という回答は減る。また同じバスに乗り合わせた人と話す場面、警官に話しかける場面にしても、地点がどこであるかによって「標準語で話す」の回答が増えたり「三川

町のことばと標準語が混ざる」の回答が増えたりし、話すことばは異なったものを使っているという意識が強い。三川町の人場面・場所によってはっきりことばを使い分けているという意識が強いといえる。

また東京・仙台の場面において、高年層と中年層の差が顕著に出た。次節でも触れるように東京・仙台では話されていることばが三川町と大きく違うと意識されているが、そうした場面では高年層はことばをうまく使い分ける自信がなく、「三川町のことばと標準語が混ざる」という回答が三世代の中でもっとも多かったと考えられる。それに対し中年層は使い分けようとする意識が他の世代よりも強く、「標準語で話す」という回答が約9割と大多数を占めた。

#### 4. ことばの異同意識

「あなたは、三川町のことばと次に挙げることばとを比べて、同じだと思いますか、違うと思いますか。」という質問をし、「全く同じ」「かなり似ている」「少し似ている」「全く違う」「分からない」という選択肢の中から答えてもらった。

三川町のことばと比較してもらったのは、次に挙げる11の土地のことばである。

・「鶴岡のことば」「酒田のことば」「藤島のことば」「余目のことば」「羽黒のことば」

この5つは三川町に近接し、三川町と同じく庄内方言地域に属する市や町である。

・「(内陸) 新庄のことば」「(内陸) 山形のことば」

この2つは庄内方言とは著しい対立をみせる内陸方言地域に属する市である。

・「仙台のことば」「秋田のことば」「新潟のことば」「東京のことば」

「東京のことば」を除く3つは山形県の隣県のことばである。平山輝夫他(1997)では秋田・新潟北部方言と庄内方言は通ずるものがあるとされ、宮城(仙台)方言と同系の内陸方言と対立するという。「東京のことば」は話者に標準語をイメージしてもらったつもりで設定した。

これらに対する回答をすべて集計したのが、図10である。

##### 4.1 庄内方言地域どうしの比較

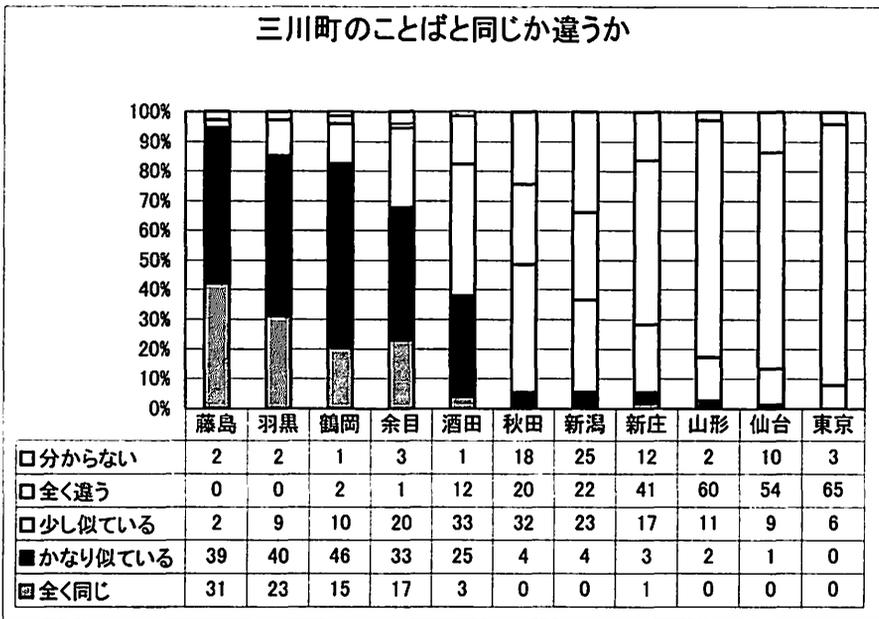
三川町のことばと「全く同じ」「かなり似ている」といった回答が多いものには、藤島、羽黒といった三川町に近接する庄内地方の市や町が並ぶ。

ただ同じ庄内地方でも異同意識にはかなり差がみられる。たとえばどちらも三川町に隣接している鶴岡・酒田を比べると、鶴岡のことばと三川町のことばは「全く同じ」「かなり似ている」とする回答は8割をこえるのに対して、酒田のことばは4割にと

どまる。平山輝夫他（1997）においても、庄内方言は最上川を境として酒田市を中心とする「川北」と鶴岡市を中心とする「川南」に分けることができるとされており、三川町の人たちはそうした差を意識しているといえるだろう。<sup>2</sup>

また酒田市に隣接する余目町のことばが「同じ」とする回答が酒田市に次いで少なく、三川町を挟んで酒田市とは反対側にある藤島町・羽黒町のことばが三川町のことばと「全く同じ」「かなり似ている」の回答の割合が多かったのも、酒田市との地理的な距離がことばとの心理的な距離に影響を及ぼしたと考えられる。

図 10



#### 4.2 他県や内陸方言地域との比較

山形方言は、三川町方言の属する庄内方言と内陸方言とに二分され、二つの方言は著しい対立をみせる。この方言の差は地域の人々にも意識されているという。その意識の現れか、秋田・新潟といった他県のことばよりも、新庄・山形といった内陸地方のことばの方がむしろ「全く違う」という回答の割合が多い。とくに山形のことばは8割が「全く違う」と答えた。三川町の人、内陸方言に対する「違う」という意識はかなり強いようである。

庄内方言は秋田・新潟北部方言に通ずるものがあると平山輝夫他（1997）でもいわれており、「秋田・新潟のことばの方が、内陸の新庄・山形のことばより三川町のことばに似ている」という三川町の人々の意識もそのようなことばの現状に沿うものといえ

る。

また、「全く違う」の回答がもっとも多かったのは「東京のことば」であった。標準語をイメージしてもらつつもりで設定した項目であるが、やはり三川町のことばからはもっとも遠いものとして意識されたようだ。

### 4.3 ことばの異同意識・まとめ

三川町住人は、三川町のことばと他の土地のことばについてはっきり「同じ」「違う」という意識を持っている。そうした意識の中でも内陸地方との差はかなり強く意識されており、他県のことばである秋田のことば・新潟のことばの「全く違う」の回答は3割ほどであるのに対し、内陸地方のことばでは「全く違う」の回答が新庄市5割、山形市8割とかなりの割合を占める。三川町住人は自分たちのことばを「山形県のことば」であるというより「庄内地方のことば」だと強く意識しているといえる。

また同じ庄内地方においても、異同意識は土地ごとに大きく差がみられる。歴史的背景があり、関西の影響を受けた酒田市のことばは庄内地方の市や町の中でも「三川町のことばと同じ」とする回答が特に少ない。三川町住人は、酒田市のことばを自分たちのことばとは違うと考えている。

以上述べてきたことから結論づけると、三川町住人は三川町のことばを『酒田とは異なった』『庄内地方の』ことばである、と意識しているといえる。

## 5. おわりに

今回、三川町での方言と標準語の使い分け意識について世代差を中心にみることができた。使い分け意識に世代差はみられるはずだという予想通り、世代ごとに大きな差がみられた。

ただ図5に関して述べたように、「三川町では異なる世代と話すとき、相手の方言使用能力に応じてことばを使いわけると」いうことを示唆する結果が出たものの、相手に合わせて歩み寄ったそのことばが実際どんなことばなのかについては、この調査で調べることはできなかった。

祖父母が孫に対して話す「三川町のことばと標準語が混ざったことば」とはどんなものなのか、逆に孫が祖父母に対して話す「三川町のことば」とはどんなものなのか。その「三川町のことば」は祖父母世代が話す「三川町のことば」とどのような違いがあるのだろうか。そうした「実態」が明らかになることで今回の「意識」調査もより意味を持つものになる。そのような談話レベルでの使い分けの実態の解明が今後の課

題である。

### 注

1 「異同」という語は「相違・差」など本来「違った点」のみを指して用いられるが、本稿中では、「似通った点・共通点」という意味も含め「違う点と同じ点」という意味で用いる。

2 酒田は北前舟の拠点港として栄えたという歴史があり、上方と盛んな交流があった。面接調査中に「酒田は大阪との北前舟の関係で、わりと関西の文化が入っている。イントネーションも関西風」と述べてくれた話者もいた。歴史的な背景がことばの異同意識に及ぼす影響は大きいといえる。

### 参考文献

平山輝夫他編（1997）『日本のことばシリーズ6 山形県のことば』明治書院  
斎藤義七郎（1982）「山形県の方言」『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会

（こばしがわ まとむ・東京都立大学学生）